

棚尾地区まちづくり事業

平成25年4月24日（水）19時～

棚尾公民館3階

第22回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

棚尾神社、味淋造り、源氏の地名と長田氏など
若宮社写真など

2 テーマ41 「杉浦宗京の土風炉（どぶろ）」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

「所蔵作品展」宗京の土風炉出品 美術館 4月6日～5月12日

「永井賓水展」 美術館地階 4月27日～8月4日

4 次回日程

第23回5月22日（水曜日）午後7時から

「琴平社」

第24回6月19日（水曜日）午後7時から

「杉浦治助」「光照寺弁天池」

テーマ41 「杉浦宗京の土風炉（どぶろ）」

1 要旨

杉浦宗京は、杉安鉄工(株)会長杉浦康成氏の祖父杉浦吉松の茶道における職名である。源氏町で、火鉢などの土器を製造し、優れた作品を多く製作した。中でも、茶道具である土風炉造りは、裏千家家元から職方のお墨付きをもらわれている。土風炉は、炭火を入れて釜をかけ湯を沸かすもので、五月から十月ごろまでの茶会で用いられる。

藤井達吉とも交際があり、お互いがその才能を認め合い、励まし合う手紙が残っている。又、土風炉に達吉が絵を描き、和歌を詠んだ作品もある。

2 風炉とは

風炉は、茶の湯の道具の一つで炭火を入れて、釜をかけ湯を沸かすもので、五月から十月ごろまでの茶会で用いられる。これ以外の冬の時期には茶室の炉を使うのが正式である。風炉の種類には、土風炉といって素焼きの風炉を黒漆で磨き上げたものや唐銅（からかね）風炉、鉄風炉などがあり、土風炉が一番あらたまった時に用いられ、普通は唐銅風炉か鉄風炉を用いる。稽古用には陶器の風炉もある。

風炉の姿には二通りあって、一つは眉風炉といって前面に穴が開いているもので、前の穴を眉と呼ぶ。もう一つが前欠き風炉といって前面の一部が切り欠けているもの。内には五徳を入れる。しかし、一般に広く用いられるのは切り合わせ風炉で、釜が風炉にぴったりと合う風炉釜。これには五徳は使わない。

3 藤井達吉美術館での展示

現在（平成25年4月6日～5月12日）碧南市藤井達吉現代美術館の所蔵作品展において、見事な土風炉1点と手紙1通が展示されている。鑑賞ガイドの説明は次の通りである。

▽杉浦宗京（1891～1957）：現・碧南市棚尾地区に生まれ。本名・吉松。竈（くど）造りの職人として出発したが奈良へ出て土風炉製作の修業を積む。帰郷後京庵の号で土風炉師として活動。1949年裏千家家元より宗京の職名を授与され、以後宗京を名乗る。棚尾地区出身の俳人・永井資水や藤井達吉との交流でも知られている。

▽出品作品 No.6 （作家名）藤井達吉・杉浦宗京

（作品名）草花文土風炉

（製作年）1949年以降

（寸法）h22.5 径31.5

（素材）陶器

平成24年度個人寄贈

No.7 （作家名）藤井達吉

（作品名）杉浦吉松（よしまつ）[宗京（そうけい）]宛て書簡

（製作年）1921（大正10）年1月9日付 卷子装

（素材）紙、ペン

平成24年度個人寄贈



4 杉浦重信氏の資料

杉浦宗京の三男重信氏が父についてまとめた「宗京」と題する資料がある。

裏千家 家元から授与された認定証

職名 今日庵

宗京

今般土風炉作成二付右、職方名トシテ授與候也

昭和二十四年十月二十九日 今日庵 印

杉浦京庵殿

展覧会入選証

愛知県 杉浦吉松

角形角切面取茶風爐

右ハ第二十一回展覧会ニ於テ鑑査ノ結果入選シタルコトヲ證ス

昭和九年四月十日 商工省工芸展覧会

展覧会入選証

八角形面取土風爐 杉浦吉松

第六回名古屋市美術展覧会ニ入選ス

昭和九年十一月一日

名古屋市長勲三等大岩勇夫

(1) 製作帖

表紙が「土風爐、手焙 寸法帖 昭和六年六月調整」と書かれ、図や寸法が描かれた製作帖がある（帖表は省略）。これらの資料をもとに杉浦重信氏が以下のように述べている。

昭和22年11月8日で終わっているのですが、同年末から23年の間に作ったものと思われる。表紙だけ見ると「寸法帖」ですが、おそらく、自分自身の土風炉の「経歴書」みたいなものにしようとしたもののようです。「面取風炉 京庵流」というのが、そもそもの土風炉の商品としてのスタートのものだろうと思います。

あとで出てくる「大正七・八年頃京庵作之面取土風炉」とありますので、スタートはその頃だろうと思います。ということは、大正6年12月に杉浦家に婿養子として入り、9年1月に妻よねが死亡（戸籍簿による）しているから、結婚間もない頃から土風炉作りを始めたと考えられます。その後、亡妻の妹よう（私たちの母）と再婚（この辺りの方言で「ナオッタ」といい、最も穏当な成り行き）して、大正10年1月長女立枝が生

まれました。それ以前に、奈良に赴いて土風炉の技術を習得したり、帰ってからも窯用の「クド」製造を本業としながら、土風炉製造のサイドビジネスに熱中したようです。

その後、分不相応な自宅や離れを新築し、おかげで先祖からの田地畑畑を売りつくし妻子が路頭に迷う寸前まで食い詰めたのが、ここに記載された昭和6年頃だったようです。いつから「京庵」(けいあん)を名乗ったかは知りませんが、物心ついた頃には京庵の印がゴロゴロしていたので、かなり前、大正の頃と思います。

京庵流の土風炉の主流は「面取土風炉」ですが、他に上の方が開いた「紅鉢風炉」が夏用として後年開発されました。また、展覧会、博覧会などの催しに出品するために、その都度ニューデザインのものを作りましたが、商品として販売されたのは、前記標準型の「面取土風炉」が九割、紅鉢型が後年になって一割くらい、その他にここにある「鳳凰」などの特注品が一年に数個といった按配だったようです。

(2) 金原福松氏

ここで、金原福松という人が出てきまして、「明治三十八年面取土風炉を大阪出品」とありますので、そもそも京庵流の土風炉の原点は金原福松氏にあったのかもしれませんが。金原福松氏は土器職人吉松の親方です。源氏橋の南東空兵衛さんの南で、庄助さんといって、当時(昭和初期～戦前まで)としては名門の土器製造卸業でした。しかし、長男が戦死するなどの不幸が続き、家業は急速に没落してしまいました。その後のご遺族の消息は知りません。この庄助さんの弟子たちが、戦前戦後の土器全盛時には大いに羽振りをきかせ、わが世の春を謳歌しましたが、わが京庵さんは全く蚊帳の外で、弟弟子の俊介さんの下請けをやったりで細々と土器業を続けていました。

父は明治24年生まれで、小学4年卒業ですから、明治36年頃に、庄助門下になったはずですが、したがってその2年後位に福松親方が土風炉を大阪の何かの展覧会に出品し、それが吉松少年をして土風炉に向わせるきっかけとなったのではないかと思います。

(3) 初入選

昭和9年3月、第21回商工省主催の工芸展で初入選しました。その当時展覧会に熱中し、あちこちの催しに出品したようです。となると、どうしても本業が疎かになり、収入の道は閉ざされ、本来の百姓の命である土地を次々手放すことになります。小学校へ入る前(昭和8,9年頃)には、小槲(棚尾橋の東)や碧南駅東の畑で瓜や砂糖キビなど食べた記憶がありますから、その当時までは僅かながら土地が残っていたようです。

(4) 奈良

奈良は京庵さんにとって、最も因縁深いところのようです。その奈良の「井倉さん」という人は、どんな人か知りませんが、父がいつも奈良の井倉さんといういつも崇敬の念を込めて言っておりましたので、おそらく茶人の有名人か、或いは土風炉の大先輩ではなかったかと思えます。

井倉さんとは戦後までお付き合いがあつて、土風炉を買っていただく(或いはその道の人に紹介していただく)お客様だったようですから、やはり茶人だったと思います。この井倉さん、その他の方々のアドバイスや、情報提供などが、田舎の土風炉屋が本場の「土風炉師」へ脱皮する大きな原動力ではないかと推測されます。

(5) 五色園

五色園というと、今でもあると思いますがその園主?の森夢幻師にも引立てられたようです。昭和12年当時に25円ということは今の金にして20万円以上でいっばしの職人の一ヶ月分の月収に匹敵します。一個でその金額ということは特注品の中でも特別品で「大大大」と書いてあるように、京庵さんの超力作だと思います。

この五色園へは父がリヤカーに土風炉数個を積んで歩いて往復したことがありました。昭和15,6年頃と思いますが、寺津や一色までは大八車で毎月クドの配達にいったい

ましたが、名古屋までの往復ということで当時でもびっくりして心配した記憶があります。

(6) 原田ふみ様

神戸の原田ふみ様は安専寺の娘さんで父よりかなり年上だったと思います。ご主人が大型船の船長で戦時に軍に徴用され潜水艦の攻撃で船と運命を共にしたという英雄の未亡人でした。やや男まさりで、後に宗京の職方取得の大恩人です。

この原田ふみ様から裏千家付の山浦宗山氏へ、そして浜本宗俊氏、その浜本氏の紹介で最高峰の今日庵に至ったようです。本来この職方名をもらうためには当時でも数十万円の金が必要でしたが、原田さんのとりなしで殆どただ同様に済んだようです。羽織袴に威儀を正した田舎者の京庵先生はコチコチになって今日庵大先生以下に拝謁したようで後日「ふみさんが俺を子ども扱いでああしてこうしてと言われ俺は子供みたいに言われるままに畏まって動いておっただけだなあ」と半ば嬉しそうに半ば恥ずかしそうな父の述懐です。

(7) 藤井達吉

藤井さんは同郷（源氏町）の先輩で、昔からお世話になっていたようです。藤井さんは「不遇な芸術家」。京庵は遙か其の上をいく超不遇の自称芸術家で、お互いの頑固な面も似ていたのでそうした面では気が合ったようです。昔の棚尾時代は知りませんが、戦後、藤井先生が碧南の道場山に住まれ文字通り不遇をかこっておられた頃が、父との交流の最もあった時だと思えます。

一度、土風炉を自転車に積んで先生のお宅に届けた時（22～23年頃）に、もんぺみたいなものをはいたヨボヨボしたような先生がわざわざ門の外まで出てきて最敬礼で見送ってくださったことが印象に残っていますが、其の時は没後にこんなに有名になれるとは夢にも思っていませんでした。晩年の父の尊敬する人といえば、安専寺の老院さんと円秀先生、それと達吉っあん（父はそう呼んでいた）でした。

資料一 達吉から吉松への手紙1

拝復仕候、御はがきありがたく候、梅雨にも不拘真夏のごとく候、御病中とのこと、折角御大切にいのり申候、過日郷里に御別れの旅をいたし候、その時御訪ねすればよろしかりしと残念におもひ候、小生もとかく溢血の気ありて、いつ死すかも知れず候間、無事のうちにと存じ氏神様に御礼と御別れに参り候て、あちこちと小供の時のおもひ出など致し候、呉々も御大切にいのり申候、互に中風気み二付、旅行も不能にて候、命ありても

（以下一行資料のコピーが折れ曲がっていて判読出来ず）

残念に存じ候も又やむなく候、今少し早く心つき候ひなば、願して置くことのありしものをとくやしく候、いかにして命あらば郷里をたづぬるやも知れず、その時お逢ひ申べく候、互にそれまで命大切に致すべく候、御返事までに、不順の折柄呉々も御自重下され度候

拝具

六月十一日

藤井達吉

杉浦吉松様

資料二 達吉から吉松への手紙2……美術館で展示している書簡

昨年十一月初め御状に接し、直様御返事申上べきで御座いましたが、御状が中々に難問であり、且少しとり込みが御座いまして、大変におくれまして、何とも申訳が御座いませんでした。何卒幾重にも御海容のほど願ひ上げます。

赤き土の御研究何よりです。ことに安藤様御一行の御後援は何より心つよいことで御座います。何卒棚尾の為に折角御精進下さいまし。

土風炉云々の件、国方氏が帝展云々のこと、これ皆見方の相違で御座いませう。芸術であり、

ないは、その人の力と見方と立場でせう。帝展に入る、入らぬは、これも見方の相違と思ひます。帝展に入ることが、決して芸術の最高とは思いません。まして四部の見る人の態度なぞより押せばです。けれ共それも程度問題です。

私は古今を通して良いものはよい、悪いものは悪いと思つてゐます、帝展第四部など、年々評をしても、一つとしてかんしんしたことは御座いません。結果はいゝものがいゝ、悪いものはわるいでせふ。けれ共良わるいにも、見る人の力によります、力がなければ、よいものも見ることが出来ません。

それより、その様な問題より、私共は自分を修養し一步でも歩くといふより外に御座いません。自分の力を、ほんとに自分が見得る様になり度いのです。土風炉に対しての考へは一体に右様に御返事致すより外にないと思ひます。あしからず御了承下さいまし。質材も大切ですが、それより作る人の心が猶大切です。精神の修養、それ丈けと私は思つてゐます。それが出来ないで命をなげ出して苦しんでゐるのです。

ではこれで失れ致します。時節柄御自愛下さいまし。

拝具

乍延引御返事までに
一月九日

藤井達吉

注 海容…海の如く広き心を以て罪を許す。

資料三 達吉から吉松への手紙3

謹啓晩秋の候 愈々(いよいよ)御清祥慶賀の至りに存上げます。相州の真鶴の漁村に従来の社会的の一切からはなれて轉り住みましてからもう四年になります。どうやら少し漁民らしくなりました。

就きましては此度名古屋に於きまして、私の初めての或いは最後になりますかの個展を開くことになりました。東京にては二十年来一切の公開の展覧会に出品を致さなくなりまして以来、三・五年位に一度づつ二三の部屋飾りをした綜合陳列の個展を致して参りました位で本年も春以来一二度支度を致しましたが健康が許さず遂に来年に延期してしまいました。実は東京の会をすませて名古屋に陳列する心組で御座いましたが思ひがけなくもある一二の方の御好意によって突然に開くことになりました。

もとより私は画家にもあらず無論工芸家にもあらず、昔日の素人に還りまして、我侘な心の趣くまゝに製作致して参りました。自然社会的地位も市価の一切を持ちませぬ私はいはば師もなく弟子もなく友もない孤独者であります。この遍路者の会は売る目的は少しも御座いません、又、売るとして買う人もない私の作品では御座いますが、郷県であり、愛知社会員時代以来、市民展などいくつかの親しみも出来まして此会になったので御座います。

御散歩がてら御茶でも召し上がりながらお話し方々御来駕下さるれば此上ない光栄と存じます。私の作品は兎角一般受けのしない定評が御座いますのでご案内状も極めて少数に限りました次第で御座います。これ又あしからず御思召下さいます様にお願ひ申し上げます。

陳列も東京で致す様に部屋飾風に致しましたと申して決して一義的な何の主張も理想も理論も御座いません。日常生活の有りのままの姿で御座います。出来る限り自分の部屋の延長に致し度く存じましたが、少し廣過ぎた威は御座いますが心持ち丈けはそのつもりで御座います。乱筆ながらご案内申し上げます。

敬具

かしこしや 命たまはり 今朝もまた この狭庭辺に いつる陽おろがむ
真鶴にて

藤井達吉

場所 名古屋市東区朝日町 名古屋美術倶楽部
期日 昭和14年11月1日、2日、3日

(8) 安藤円秀

安藤円秀様は安専寺の住職安藤秀麿師の長男で東京在住東大の教授を始めいろいろの要職につき父の言によれば大将相当の偉い人だったようで、父が無条件に心酔していた大先生です。安藤一族のうち秀麿師と円秀氏、神戸の原田ふみ様の三人には特にお世話になったようでこの内の一人が欠けても「宗京」は存在しなかったものと思います。円秀先生と親交（可愛がっていただいたということで対等の親交では勿論ない）のあることが父には一番の自慢で、「先生は勅任官であられるゾ！」とよく聞かされましたが、親の心子知らずで海軍に入る時に色紙をもらったり、禁衛府（宮内庁所属・旧近衛師団）にいる時にどの隊かと照会があったりで、父からは度々礼状を出すように督促されたが出したような記憶がないから欠礼のままであったと思います。おそらく東京方面の有名人との繋がり、円秀先生の口添えが一つともう一つは武富濟代議士の線だと思ひます。

武富濟代議士との繋がりとはどのような経緯かは忘れましたが（父の生前に聞いたような気がする）政治家で父が本心尊敬していたのはこの人以外にないようでした。かと言って当時金銭的な寄付などビター文出せるわけがないから貧乏土風炉屋を取り立ててくれた武富代議士は今の政治屋には無い何かがあったものと思ひます。

その点藤原銀次郎氏にはやや批判的だったようで要するに「貰うが当たり前」のような態度だったかも知れません。同じ線（と思う）で若槻礼治郎総理大臣にまで作品を寄贈し、その手紙（当然ながら秘書の書いたもの）を後生大事に自慢するようなお人好しのお目出度い面が父には多分ありました。

資料四 安藤円秀から京庵への手紙

拝呈残暑厳しく候処益々御清安奉賀候扱突然之儀ニ御座候へども、小生親しきもの此度茶室相営み有之、就てハ其の祝ひとして土風炉一箇贈呈致し度、御多忙中を申兼候へども、道安・土風炉一ヶ御製作下さる可く候也、尤も既成之品有之候へば大ニ好都合ニ存候、出来之上ハ御面倒ながら東京小生宅まで御送り下され候様願上候、小生旧盆に者帰省仕り、明後日夕方迄・
・を仕り居候右何分よろしく御願上候、

匆々

八月廿五日

安藤円秀

杉浦京庵様

尚々拙宅ハ左之通ニ候

東京市世田谷区世田谷二丁目一三三九 安藤円秀宛

二伸

時局柄箱之出来なることハ（以下不明）

資料五 若槻礼次郎から吉松への礼文

拝啓時下仲秋之候愈々御清穆^{せいぼく}之段奉大賀候、陳者此度ハ洵^{まこと}に結構なる御力作態々御恵贈被下御芳志の程難有奉深謝候
右不取敢以書中厚く御礼申上度如斯御座候

敬具

昭和六年十月九日

男爵 若槻礼次郎

杉浦吉松殿

侍史

資料六 藤原銀次郎から吉松への礼文

拝啓小生暫く旅行中の処数日前帰郷致候豫而武富氏より御通知有之候御自製の土風炉御送付有之、正ニ落手仕候、右不取敢御挨拶迄、得貴意候

承具

四月十七日

藤原銀次郎

杉浦吉松殿

(9) 西大寺

西大寺は大きな抹茶茶碗の大茶会で有名な寺ですが、おそらく奈良の井倉さんかどなたかの紹介で、大茶風炉を寄贈したものと思います。今でもこの大茶風炉は使われておるようで、十数年ほど前に誰だったか忘れたが、「西大寺で見てきた」と言っていた人がありました。この一条知成氏と西大寺執事からの手紙は、奈良の西大寺に大茶風炉を寄贈したことに關するものと思います。一条知成氏がどういう人か分かりませんが姓からして昔の公卿さんだろうと察せられます。

資料七 西大寺執事から京庵への礼文

拝復 酷暑之候に御座候処、貴家益々御清福之条、奉慶賀候陳者此度者誠に美事なる土風炉御寄贈被下難有御厚情申上候、幸ひ途中無事本日着荷仕候、欣喜致居候寺宝として永久保存可仕、不取敢御礼旁々安着御報申上候

先は御厚懃迄如此御座候

早々敬具

七月廿日

西大寺執事

杉浦京庵様

資料八 一条知成から京庵への礼文

時下晩秋・御清迪奉賀上候、未接聲咳候へ共参・の芸術家として御高名ハかねがね拝承罷在、ことに西大寺大土風炉の作家として、斯道に志あるもの、夙に喧伝致し居、欽佩之尽不堪候、このたび小笠原氏の御・介により遙に高作品罷贈御・命を拝候、昨夕無事着荷致候、かねがね承居候通、深草あたりの作品とハ、その稟質を異に致居候のみならず、その様式も古雅幽麗、まことに当代の稀品と存上候、永々愛蔵襲重し候、この御・慮を拝領致度存上候、先者右不取敢御請御礼申上度、如此二御座候、

匆々拝具

十一月二日

一条知成

杉浦京庵様

侍史

注 清迪…涼しくなる。

聲咳…談笑する。笑いさざめく。

欽佩…うやまい心にとどむ。

稟質…生まれつきの性質。

(10) 京庵土風炉会

このような会があったことは今まで知らなかったです。どんな経緯で、その後どうなったかは知らないですが、原文のままを掲載します。尚これは安専寺で開催ということでこの「案」は筆跡からみて円秀先生の筆になるものと思われます。おそらく、老院（秀磨師）が京庵を助けてやろうと長男の円秀氏に指示して段取りをさせ、ここまでもってきたものと思います。

京庵土風炉会発起趣意書

京庵氏は多年京都流の土風炉を研究し、其の製作ニ従事して居られますが、其の熱誠と努力とは、洵に感歎に堪へぬものがあります。殊に其の製作態度の真摯なこと、

芸術的良心の至深なことゝは、遙に俗流を擢^ぬいてみて、其の技巧の進境は将来大に期待されてゐます。茲に我等同志相謀り、京庵土風炉会を鑽^{さん}向上の一助たらしめたいと存じます、幸に各位の御賛同を得、奮って御入会の栄を賜らんことを偏に御願ひ申し上げます、

敬白

発起人一同

注 進境…進歩の具合や程度。

注 鑽…物事の道理を深く究める。研鑽。

会則

- 一 本会ハ京庵土風炉会ト称シ、昭和六年月 日開催ス
- 一 会所 棚尾町安専寺
- 一 本会員ニハ当日左ノ品ヲ頒ツ
面取土風炉（巾内径……、高径……）箱付一据
- 一 会員ニハ景品トシテ五客毎ニ抽籤ニ依リ、自作小火鉢一箇を贈呈ス
- 一 会費ハ金十二円トシ、会日ニ申受ルモノトス、
- 一 開会当日作品ヲ陳列シ、会員ノ選択ニ任ス
- 一 開会当日粗末ナル茶菓ヲ呈ス

謹白 愚鈍な私の未熟な作品は、到底皆様の御満足を得られる様なものではありませんが、今後益々修練工夫して、是非とも土技の真髓を得度いと、日夜苦心努力を続けてゐます。

今回はからずも後援諸氏の御厚情により、拙作頒布会を企図して頂くことになりましたが、固より拙劣の技、各位の御芳志に酬^むいるに足りないことを思ひて恐縮致します。

然しながらさゝやかな私の全力を竭^{つく}して製作に没頭してゐます、若し博雅諸賢の御賛助を得て、私の微志を遂げさせて頂くことを得ば、真に望外の光栄と存じます。

会主再拝

(11) 宗京ファン

父は商売柄茶人との付き合いが多かったです。それも地元より京都、奈良の本場に多く、全国的に宗京ファンもかなりあったようです。この短冊などもそうしたファンのものではないかと思われます。ただ、これらの人がどんな人でお付き合いがどの程度のものであったかは永遠の謎になりそうです。

生前の父は甲斐性なしのイメージが強かったが、没後に「京庵さんは……」「宗京先生は……」と聞かされてへえーそんな人だったかな？と今更ながら父への認識を新たにすることがありますが、それでも経済的に妻子に苦勞をかけた親父の裏のイメージは消えないです。

資料九 短冊

(和歌)

友 宗仁
一すじの 道をしる人に へだてなく くめどつきせぬ 御茶のことわり

宗京大人の眉風呂にそえて 宗仁
人柄の ミゆるが嬉し 眉風呂に すがしきそえて によふ松風

注 によふ：呻吟する。うめく。うなる。

百日紅 仁子
原爆の あとまだいえぬ 夏草の ひろ野あかるく 百日紅さく

漁村花 仁子
汐の香の 霞にこもる 磯・に とまやも見えて 桜花さく

閑居宿 仁子
月影は いよいよすみて 鳴むしの こゑに埋るゝ 蓬生よもぎゆふの宿

秋水 仁子
奥耶馬の 笈の水の つめたさよ とまりの一夜 秋ふかくして

(俳句)

石門に 走せ入る 濤の 小春哉 六風子
菊根分 大庭園に 隣して 六風子

(12) 筆字

父は仕事柄筆字を書く機会が多くて大変苦勞したようです。ある時安専寺でもって文字を勉強せよと言われて一念発起四十歳の手習いが始まりました。私が小学校低学年の頃だから昭和十年代始めで父が四十歳半ばだと思います。当時の碧南国民学校の習字の先生について特訓に次ぐ特訓で一応の文字が書けるようになりました。速成教育の筆法だからそんなに上手ではないと思うが、箱書きなどはいかにも楽しそうに書いているのを見て、子供心には本当に上手い字だと思いました。海軍へ入ってから父からの手紙を班長が褒めてくれたりしてその時ばかりは父の偉大さに鼻が高かったです。

5 長田銑司氏の著作から

日本料理小判天の長田銑司氏が、宗京の土風炉について詳しく調査されているのでその著作を引用する。文はその中の「あいちの味」によった。

当初発表

中部新報社「四季の味・風土の心 料理つれづれ」昭和55年～56年
上記をまとめて発刊

「三河・四季の味」昭和58年 れんが新報社 発行

その後、他の著作と併せて再発刊

「あいちの味」平成24年12月 榊北白川書房 発行

その(1)

茶道は、作法と共に器物を知ることが大切であることは、よくご承知の通りです。茶の湯に使われる道具に対しての知識は、点前はもちろん茶の心といったものを会得する為にも、ぜひ必要なことです。また、専門知識を持ち、深く研究すればよいというものでも、興味だけで鑑賞すればよいというものでもありません。茶の心得をもって見、それに使われている器物を生かすように使う心の在り方が大切でしょう。そして、その道具や器物を心を込めて作られた先人達の気持ちにふれるということは、茶道を通して私たちの心を豊かなものにしてくれるでしょう。郷土の芸術家が残してくれたその作品にふれることは、その方が身近なだけに私たちは親しみをおぼえその作品に温かさを感じます。

土風炉は、五月から十月まで使われるものですが、そんな気持ちから、茶の湯に関して、わが郷土の宗京氏の土風炉をご好意にあまえて載せさせていただきます。裏千家の山藤宗

山氏の「風炉灰の話」の中に次のような一文があります。

著名なる風炉師として、まず土風炉では、千家十職の永楽家の十一代保全迄が有名であり、殊に三代宗全が傑出していました。保全より土風炉師を廃し、永楽善五郎と改名して現今に至っています。他に奈良西の京の上田宗品、太閤より天下一の名を貰った天下一宗四郎、辻井播磨などの名人があります。現今では深草の浅尾宗全、白井半七、当流の職方としては、加賀山中の山崎宗元、三河の杉浦宗京の諸氏がいます。

その(2)

郭公与 奈所転可 和閑連 遠しむ羅牟
許の堂悲比登の 所伝爾 布類あ面
かっこうよ なぞてか わかれ をしむらむ
このたびびとの そでに ふるあめ

宗京氏の土風炉に描かれた、藤井達吉翁の和歌と草花を、大浜の福光堂社長禰宜田貞一氏に読んでいただきました。草花は達吉翁の好んで描かれた高山植物ともみられ、また達吉翁の和歌、

たがために さくにはあらで みちのべの
しこのしこぐさ さくべくさきぬ

の“しこぐさ”とも言われています。

この和やかな暖かみのある土風炉に「棒やすり」の先を尖らせて画かれた、その生々しい線が、まだみずみずしさを持っているのに、私は目を見張りました。

藤井達吉翁が子供の頃過ごされた、棚尾の源氏と宗京氏の自宅とは同じ源氏で、家も近かった為、お二人は当時からよく知ってみえたそうです。藤井先生が道場山に住まれ、(昭和25年から31年まで)宗京氏が土風炉を製作されるようになってからは禰宜田貞一氏がもんぺ姿の重い藤井先生を自転車の上に乗せ、デコボコ道を自転車の前が上がりそうになりながら宗京氏の家まで送られ、その道中藤井先生は「京庵さんは、隠れた本当の芸術家だ」と、その道の心の通いあう喜びを語ってみえたそうです。藤井先生を自転車に乗せ、先生のいろいろな観察にご一緒された禰宜田氏はその当時に懐かしく思い出してみえます。宗京氏は杉安鉄工社長杉浦安雄氏の故厳父であられたことはよくご存知のことでしょう。

その(3)

大茶盛(おおちゃもり) 蝶ちらちらの 西大寺 青畝

毎年、四月十五日、十六日に行われる奈良西の京の西大寺の大茶盛を、テレビや新聞、雑誌などでご覧になったことがおありと思います。

棚尾の安専寺のご住職安藤文夫氏が過日、この西大寺を訪ねられた時、「宗京氏の土風炉を大茶盛の時にもありがたく使わせていただいています」と言われ、胸のあつくなるのを覚えたと言ってみえました。この全てがキングサイズの大茶盛の起こりは、西大寺の中興開山思円上人が、ある年始めのご修法の終わりに、鎮守の八幡宮をまいられた時、雪が降ってきて、絶景だったので、上人自ら茶を点でて多くの人に施されたと言われたのが始まりで、この茶を飲むと病を免れるといわれ、愛染堂近くの大広間に雪景色の築山を作り、大きな茶せんで点てた茶を人々に振舞われるのです。

又、宗京の職名をいただかれたのは、安専寺の先住の義姉(安藤安麿氏の娘)にあたられ、神戸の日本郵船「大洋丸」の船長夫人で、茶人の原田ふみさんにより、山藤宗山さんの口添えによるもので、この時京庵夫妻は原田さん宅で一泊されてから三人で京都に入られ、紋付羽織袴に身を整えて、裏千家家元にお遭いになり、淡々齋は、自ら目の前で、その職名のお墨付きをお書きになったといわれます。

又、職方として奈良に来て、土風炉を製作されるようにと、奈良の方から宗京宅へ足を

運ばれ再三の要望があり、賢夫人は「あなたがお望みならば、家中でまいりましょう」と励まされたそうですが、宗京氏はこの地に留まることを決意されたとお聞きしています。宗京氏の土風炉はこうして広く認められてきましたが、昭和二十年代の日本は決して豊ではありませんでした。

その(4)

茶道の開祖は珠光(じゅこう 1423～1502)、中興の祖は紹鷗(じょうおう 1502～1555)、教祖といえば、利休(1522～1591)だといわれます。

侘助や たぎりそめたる 釜の音 山崎多角

侘助とは、朝日新聞社刊の「世界の植物」の中に、世俗を離れて閑散を楽しむ侘(わび)と趣味や芸道に身を打ち込む好き(すき)＝数奇が複合した言葉で、茶花に適するツバキの意味だろうとあります。桑田忠親氏の「茶道の歴史」によりますと、紹鷗の考案した侘び道具として取り上げたいものに、土風炉と竹の蓋物があるとされています。

風炉は、もとは金物ですが、奈良には早くから土で作った風炉があり、奈良風炉と呼ばれていました。この奈良風炉こそ土風炉ですから「茶湯古事談」をみますと、紹鷗好みの土風炉は、西の京の宗四郎に焼かせたもので、これが本格的な茶道具として用いられた始まりだと言われています。

土風炉には、紹鷗風炉、道安風炉、面取風炉、紅鉢(べにばち)風炉、眉風炉、透木(すきぎ)風炉、瓢箪風炉などとその形や好みから呼ばれるものがあります。

宗京氏は、棚尾の安専寺の安藤円秀師(当時東大教授)や現住職文夫氏の母堂道子氏にも相談され、奉書紙のような上質の紙に、土風炉についての小文を印刷して、その作品に添えられました。戦後は上質紙がなくなったため、三男の重信氏(杉安鉄工株式会社専務)が、ガリ版で書かれたと聞いています。重信氏は断片的な記憶ですが、次のようにその大要を書いて下さいました。宗京氏の作品に対する温かい心がうかがえるものだと思います。

土風炉について

私は三年間、奈良で土風炉作りの技術を習い、最も陶器に適する三河国碧海郡の粘土を使って土風炉作りを始めました。私の作る土風炉は、ロクロや型を使わず全て手作りです。まず粘土を乾かし、これを臼で粉にして、絹ごしにかけ、これを練ったものを素材にしました。入念に焼き上げた上、漆を塗るのでなく、何回も何回もすり込んで仕上げました。……。

その(5)

宗京氏の作品は、土風炉の他に手焙り、炭こたつ、火鉢、花台、釜敷などがあります。手焙りの良さは実際に使ってぬくもりを手に感じられた方ならその作品の温かさに、忘れられない親しみを抱いてみえると思います。土は近くの平七、伏見屋、棚尾のものを使われ、又、特産の赤土で作られた角火鉢には、ミツウロコ練炭の重役でみえた俳人永井賓水翁が句を、当時藤井達吉先生の命を受けて、ミツウロコ窯業に指導に来てみえた栗木伎茶夫氏が絵を描かれた、三人合作のものもあります。

宗京氏は、昭和二十五・六年頃から健康がすぐれず闘病の日々を送られるようになりました。達吉翁のお見舞いの手紙にはお二人の結びつきのほのぼのとした温もりをかんじます。「……互いに中風気にては、旅行も不能にて候、命ありてもふ御逢ひかなはずと存じ候、残念に存じ候も、又やむなき候、今少し早く心つき候ひならば、願ひして置くことのありしものとくやしく候……」原文一部略

補足説明 若宮社写真など

若宮町1-84 榊原久雄氏提供

明治時代の若宮社



榊原家に保管されている若宮社の燈籠

